

談話におけるメタ言語の役割

西條美紀著

談話におけるメタ言語の役割

西 條 美 紀 著



風 間 書 房

著者略歴

西 條 美 紀 (さいじょう みき)

- 1995年 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科日本語文化専攻修了
(修士・人文科学)
1998年 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻修了
(博士・人文科学)
1999年 早稲田大学日本語研究教育センター客員講師
2001年 東京工業大学留学生センター助教授

主な論文

- 『談話におけるメタ言語の役割—日本語母語話者・日本語学習者による
談話展開と理解』(1997年度お茶の水女子大学 博士学位論文)
『討論場面におけるメタ言語の機能—談話の組織化機能を中心に』
(1994年度お茶の水女子大学 修士学位論文)
「テレビ討論における話題転換にメタ言語が果たす役割」『表現研究』
第63号(表現学会)
「ディベートにおけるメタ言語」『日本語学』第15巻 11号(明治書院)
「接触場面におけるメタ言語的方略の有用性—発話理解の問題を解決する
学習者方略についての実証的研究」『世界の日本語教育』第8号
(国際交流基金日本語国際センター)
「弁証法的作文過程のための作文指導」『日本語教育』第105号
(日本語教育学会)
「談話構造図作成法によるノートテイクの訓練効果について」
『紀要』第14号(早稲田大学日本語研究教育センター)

談話におけるメタ言語の役割

1999年11月30日 初版第1刷発行
2002年7月15日 初版第2刷発行

著 者 西 條 美 紀

発行者 風 間 務

発行所 株式会社 風 間 書 房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
電話 03(3291)5729 FAX 03(3291)5757
振替 00110-5-1853

印刷 太平印刷社 製本 矢嶋製本

©1999 Miki Saijo

NDC分類: 801.04

ISBN4-7599-1174-X Printed in Japan

目 次

第1章 序論	1
1-1 問題究明の出発点	1
1-2 メタ言語についての先行研究	2
1-3 言語研究におけるメタ言語という観点の妥当性	8
1-4 研究の目的	9
1-5 談話におけるメタ言語の役割についての仮定	9
1-6 談話におけるメタ言語の役割について解かれるべき3つの問題	10
1-7 本研究で用いる研究方略	12
1-8 本研究における用語の定義	14
第2章 メタ言語の機能	17
2-1 メタ言語使用調査	17
2-2 談話資料	18
2-3 メタ言語の機能分類	21
2-4 [研究1] : 各討論場面におけるメタ言語使用についての 量的分析	23
2-5 [研究2] : メタ言語機能についての質的分析	29
2-6 メタ言語についての機能分類分析の限界	45
第3章 聴解におけるメタ言語の有用性	49
3-1 聴解の手がかりについての先行研究	49
3-2 [研究3] : 母語話者の聴解におけるメタ言語の有用性	53
3-3 [研究4] : 学習者の聴解におけるメタ言語の有用性	61

3-4	本章で行ったふたつの研究についての結果と考察	67
第4章	接触場面におけるメタ言語的方略の有用性	69
4-1	海外で日本語を学ぶ学習者の問題	69
4-2	接触場面におけるコミュニケーション上の問題	70
4-3	接触場面における発話理解に関わる方略	72
4-4	[研究5]: 接触場面における学習者方略についての検討	74
4-5	[研究6]: メタ言語的方略の訓練効果	86
4-6	結果と考察	94
第5章	弁証法的作文過程におけるメタ言語使用の有用性 と教師による支援	97
5-1	考えを深める作文過程とは	98
5-2	作文過程についての心理学的研究	99
5-3	弁証法的作文過程についての仮説	100
5-4	[研究7]: 学習者の作文推敲における教師のフィードバック とメタ言語の役割	101
5-5	結果と考察	113
第6章	総合的考察	115
6-1	本研究によって得られた知見の総括	115
6-2	談話におけるメタ言語の役割	121
6-3	メタ言語使用を発見的自律学習に繋げるための提言	125
6-4	今後の課題	127
引用文献		131
謝 辞		135

第1章 序論

1-1 問題究明の出発点

何かについて人が意見を述べる時、たいいていの場合、話し手は相手に理解されているだろうと思いながら話をする。聞いている方も、聞こうとする気持ちがあれば、相手の談話について「こういうことだろうな」と思いながら聞いているであろう。しかし、話し手が今話していることについて持っている心内表象と、聞き手が談話を聞きながら作る心内表象が、ある程度一致しているかどうかを確かめつつ、談話が進行してゆくことはあまりない。話し手は相手との関係が非対称なものでない限り、「わかりましたか」とか、「先にいっていいですか」とは言わないし、相手に理解されていないとは思っていないであろう。聞き手も、理解に多少の不安は感じていても、「どういうことですか」とか「こういうことですね」などとは言わないし、理解できないことを明示することはあまりない。話をした結果としては、話し手と聞き手の間になんらかの理解が生じるか、生じないかのどちらかであるが、どちらの場合も相手が何を理解したかが表面化することはなく、なんとなく相手の言っていることをわかったような気になる。これが、意見を述べる談話の場で実際に行われている談話展開と談話理解であろう。

だが、意見を述べる人の中には、聞き手の「腑に落ちる」ように話す人がいる。聞き手に納得させるのではなく、聞き手の理解過程を考えながら、聞き手が自然と納得するように話しているという印象を与える話し手がいる。その一方、聞き手に強い違和感を与える話し方をする人もいる。この差は、談話の中の何によってもたらされるものなのだろうか。また、上で述べた話し手と聞き手が特別な齟齬もなく談話の場を維持している場面では、どうい

うことが行われているのだろうか。さらに、理解されやすい談話展開の特徴というものがあるのだろうか。これらの疑問はひとことで言えば、談話理解に役立つ談話中の要素は何かという問題である。そのように考えながら、意見を述べる場でのスピーチの収集を行っている時に、「腑に落ちる」タイプの話し方の話者の談話には、自分の談話についてのコメントが多く、そのコメントが談話を区切り、「今、何を話しているか」を語っているという事に気づいた。このコメントは、言語に言及するという意味で「メタ言語」であると言える。すなわち、わかりやすい話を展開する話者の談話展開においてはメタ言語が使われており、それが聞き手の理解に役立っているという印象を受けた。この印象の当否を談話資料によって検証しようと考えたのが、本研究の出発点である。

その検証のための第1歩として、これまで、メタ言語についての研究がどのように行われてきたのかについて次に述べる。

1-2 メタ言語についての先行研究

「メタ」という語はギリシャ語の meta に由来し、「間に」あるいは、「後に」を意味する接頭語である（『日本大百科全書』22巻）。この接頭語を使って、「メタ言語」という語を造語したのは、Tarski (1944, 飯田隆訳 1987) である。Tarski (1944) は、「真理の定義の問題および、より一般的には、意味論に属する問題を論ずる際には、ふたつの相異なる言語を用いなければならない。そのうちのひとつはそれに『ついて語られる』言語である、もうひとつの言語は、その中で我々が第1の言語に『ついて語る』言語であり、とりわけ、それを使って第1の言語に対する真理の定義を構成しよう和我々が考えている言語である。第1の言語は『対象言語』と呼ばれ、第2の言語は『メタ言語』と呼ばれる」(p. 68) と述べ、メタ言語と対象言語を定義した。この引用から分かるように、メタ言語という用語は、もともと、「真理論の構築という限定された目的」(田野村, 1996: 12) のために導入された用語であっ

た。しかし、この対象言語とメタ言語という区別は、Tarski (1944) 以来、自然言語を扱う様々な文献の中に取り入れられていった。本研究では、言語の問題の中でも談話の問題を扱うので、談話におけるメタ言語がどのように研究されてきたかを示す先行研究を以下に幾つか挙げ、それについて述べる(1)。

Jakobson (1980, 池上嘉彦・山中圭一訳 1984) (2) は「言葉はその多様な機能すべてにわたって研究されなければならない」(p. 101) とし、言語伝達における構成因子とその機能を6つに分類した。送り手、受け手、メッセージ、場面、コード、接触の6つの因子である。因子にはそれぞれの機能(主情的、能動的、指示的、詩的、交話的、メタ言語的)があり、コードがメタ言語的機能をおうとされている。ただし、言語の機能は様々の順位で階層化されており、ただひとつだけの言語的機能を果たす言語的メッセージを見付けることは難しいとも言っている。また、Jakobson (1980) はメタ言語を言語コード自体について語るための言語であるとし、メタ言語の使用に関して「我々は自分の発言のメタ言語的性格に気付かぬままメタ言語を使用する。何も専門領域に限った事ではなくて、メタ言語の操作は我々の言語活動の本質部分をなしているのである。送り手や受け手に、果たして自分達が同じコードを使っているかどうかを確かめる必要の生じた時、常に言語は〈コード〉に焦点を合わされ、こうして〈メタ言語的〉(metalingualあるいは注解的)機能を果たすことになる」(p. 108) と述べている。メタ言語の機能については、ここに引用したように、注釈的機能という但し書きを付けており、言語のコードについて焦点をあわせる機能を、コードについての解釈とそのコードを使用する事について注を入れる行為ととらえていたと考えられる。さらに、いかなる

(1) 本章の先行研究紹介は、メタ言語研究を網羅的に紹介することは目的とせず、本研究に關係するメタ言語研究の概略を述べて、何が問題として残されているかを明らかにすることを目的とする。先行研究については、それぞれの章で、その章が扱う問題についての研究を詳しく述べる。

(2) この引用は1984年の邦訳から採ったが、本文中に述べた論文の初出は1956年のアメリカ言語学会年次大会における会長挨拶である。

言語的メッセージも、「その構成素を選択し、結合するには当の言語コードに頼らざるを得ないが、この不断の枠組みのうらに一連のメタ言語的操作が潜んでいることを我々は次第にはっきりと認識しはじめている」(p.116)とし、メタ言語に言語メッセージにおいて、何と何をどう結び付けるかの枠組みを設定してゆく機能があることを示唆している。

この言語機能の重複性の問題とメタ言語の言語メッセージにおける枠組み設定機能の問題を Schifffrin (1980) は、実際の談話において検討した。彼女は、「トークについてのトークがどのように談話に統合されるのか。そして、その統合は談話のどこで起き、なぜ、その場所であってはならないのか。これらの事は先行研究で明らかにされていない」(p.200)と述べ、トークについてのトークをメタトークと呼んだ。このメタトークは、談話の境界を画するものであり、境界内の談話構造を示すものであるとも考えた。そして、この談話の境界によって区切られた単位をディスコースブラケットと呼び、メタトークはディスコースブラケットとして、談話を区切るだけでなく、その談話にラベルをはる働きがあり、ラベルを貼られた談話がその他の部分とどういう関係にあり、聞き手にどのように聞かれるべきかを示しているとした。また、ディスコースの初めにおかれたブラケットを後方照応的ブラケットとし、言及の対象がブラケットの後に続くディスコースの中にあるものとした。その言及の対象は聞き手にとっての新情報であり、メタトークはその内容を予測させる働きを持つとしている。ディスコースの終結部におかれたブラケットを前方照応ブラケットとし、メタトークによる言及の対象が前にあるものとした。その対象は聞き手にとっての旧情報であり、その内容をフォローする働きを持つとしている。そしてこれらのブラケットが談話を構造化する側面と談話の内容についての評価をする側面をあわせ持っており、それは特に談話の自己修正 (self-repair) が行われる文脈において顕著であるとし、インタビューの実例をあげて解説している。しかし、この研究では、メタトークという概念とディスコースブラケットという概念が分かちがたく結びつ

いており、談話を構造化したり、談話にラベルを貼るなどの機能がメタ言語にあるのかどうかという点が明瞭でない。また、談話資料が隣人とのカジュアルなインタビューであり、例として挙げられている談話が断片的で、その談話例において、Schiffrin (1980) の言うメタトークが発話として現われていることはわかるが、そのメタトークが談話に対して、これまで述べてきたような機能を持っているのかを検証するものではない。さらに、対面の相互作用のある談話資料についての分析でありながら、聞き手は、話者の談話の何をどのように聞いたかについても考察されていない。

一方、Stubbs (1983, 南出康世・内田聖二訳 1989) は Schiffrin (1980) よりも談話中のメタ言語の機能を積極的に認めている。彼は、Jakobson (1980) のいう接触的、詩的、メタ言語的機能を「これらはすべて伝達についての伝達である」(p. 58) とし、これらの機能を「メタコミュニケーション」(metacommunication) として再分類し、メタコミュニケーションの定義を、「発話場面を言葉によって調整する事」とした。このメタコミュニケーションという概念は、Bateson (1972) が「話し手同士の関係を主題とする談話」(p. 178) としたメタコミュニケーション (metacommunicative) の概念と共通するものと考えられる。また、Stubbs はメタコミュニケーションの機能を果たす発話の同定について、「ある意味では、すべての発話は何等かのメタコミュニケーション機能を伴い」、「すべての発話は多くの機能を持っているが、基本的なメタコミュニケーションの機能を果たす発話とそうでないものを区別できる」(p. 59) としている。しかし、メタコミュニケーションの発話を同定する基準は明確にしていない。Stubbs (1983) の中で行われているのは教室場面を取り上げて、このようなメタコミュニケーションを用いて、授業の場で教師が何をしているのかを調査し、機能分類を行うことであった。機能としては①関心を引き関心を示す、②発言量の決定、③理解のチェックと確認、④要約、⑤定義付け、⑥編集、⑦訂正、⑧話題の特定化の8つをあげ、それぞれに具体例を出している。そしてこのようなすべてのメタコミュ

ニケーションは「伝達回路の働きを調整し、使用された言語の意味を明確にし、系統化しなおすという第一義的なメタコミュニケーション機能を有している」(p. 65)としている。しかし、機能の例として出された表現が文脈から切りはなされて提示されていることと、教師と生徒の会話という話者相互が極端に非対称な場面を取り上げているので、彼自身が指摘している談話分析の重要な問題である「話し手はお互いに理解しあっている事をどのように示すのか」の理解に迫る枠組みを提示しているとはいいがたい。

日本語によるメタ言語の先行研究としては、杉戸による一連の研究が挙げられる。杉戸(1983)は「言語行動をその成立要素の観点から見る立場」(p. 32)から、注釈としてのメタ言語的表現を分析している。ここでは言語行動を成立させている要素として12の要素を指定し、それぞれについてメタ言語的注釈が可能である事を示している。また、注釈は待遇表現と結び付けて考えられ、「言語行動主体は、言語行動の要素についての選択、評価、判定を注釈で言表する事によって、自分がそこで行う実質的な言語行動のどの側面に待遇表現上の配慮をほどこそうとするか(したか)を明言すると考えられる」(p. 38)としている。また、杉戸・塚田(1991)ではメタ言語表現を「言語行動について言及し、それ自体が言語表現をともなう言語行動」(p. 133)とし、「メタ言語表現を行う動機」として①表現の内容とその伝達の過程の調整に配慮したメタ言語表現、②人間関係の調整に配慮したメタ言語表現、③言語生活上の規範に配慮したメタ言語表現をあげている。また専門的文章をこうした動機をもったメタ言語が現れやすい素材として取り上げ、『言語生活』巻頭論文400編を対象とし、動詞と文末表現に着目してメタ言語表現の類型化を行い、どのような表現がどのような位置に現れるかを特定しようとした。また杉戸・塚田(1993)では、話し言葉である公的なあいさつ(ただし用例採取は『公用あいさつ辞典』という書き言葉資料から行われている)について同様の分析を行っている。つまり動詞、文末表現について、動詞句の目的要素と修飾要素を含め用例を採取し、その分布状態を動詞に着目して分

類し、言語行動の種類で34に、具体的な動詞として150に分類した。

これらの杉戸、杉戸・塚田の一連のメタ言語についての考察では、メタ言語が、それぞれの談話から切り離して分析されており、個々の談話において、これらのメタ言語的表現が、その使用の「動機」とされている「伝達の過程の調整」や「人間関係の調整」をどのように行っていたのかが不明である。したがって、この「動機」の分類の当否についても検証することができない。

日本語教育の観点から、メタ言語を取り上げた研究としては、古別府(1992, 1994)が挙げられる。古別府(1994)は、研究報告場面における日本人と留学生のメタ言語表現の比較を行った。古別府は「メタ言語表現はその解釈により、際限なく広がる可能性をもつ」(p. 103)として、その定義を「研究報告場面での口頭発表において、発表時に、発表者が進行上用いるメタ表現(自分がこれから言う事、言った事に言及する表現)で、言う、説明するなどの口に出して言う事を直接に示す言葉及び、分析する、検討するのよう言語行動についてはっきりと明示する言葉を含む表現」(p. 103)としている。また、「このようなメタ言語表現は話し手の聞き手に対するわかりやすさのための主観的な配慮(伝達過程調整)を中心に、さらに、聞き手との関係を良好に保つための丁寧さのための配慮(対人関係調整)があるという結論を得た」(p. 103)としているが、これは杉戸ら(1991)を踏まえたものである。また、このような配慮がメタ言語表現使用の誘因になっているが、留学生は非日常的な口頭発表のような場でそれを使えないとし、口頭発表のメタ表現の機能を提示して、表現の形式化を試みている。メタ言語の機能として7分類をたてて、日本人(談話研究の研究者5名)と留学生(上級レベル9名)によるメタ言語表現の使用を比較している。この研究は留学生のための口頭発表場面におけるメタ言語の教材を作る前段階と位置付けられており、メタ言語表現の構成要素のリストを作っている。また構成要素に焦点をあてながらも、メタ言語表現を機能でとらえ、多面的な機能分類をたてている。しかし、古別府の結論であるメタ言語表現による伝達過程調整と対人関係調

整が、口頭発表の中でどのように行われているかについては考察がないので、この機能分類の妥当性を検証することができない。さらに、こういう機能にはこういう言い回しがあるというリストがあるが、本当にこれらの表現が談話の展開に有用であったかについての考察もない。

これまで見てきたことからわかるように、これらの先行研究においては、何をメタ言語とするかという明確な定義が共有されているわけではない。ただ、「言語に言及する言語」というゆるい定義づけが共通するだけである。これは、田野村(1996)が指摘するように、「言語について語ることの多様性」(p.11)に起因するものと思われる。従って、これらの先行研究に共通しているのは、メタ言語という概念の内容ではなくて、言語を「語るものと語られるものに分けて考える」という観点であるということができる。

では、これらの先行研究では明確に論じられてはいないが、言語研究において、メタ言語という観点から分析をすることの妥当性はどのような点にあるのだろうか。

1-3 言語研究におけるメタ言語という観点の妥当性

Brown(1978, 湯川良三・石田裕久訳 1984)はなぜ、認知にメタという語をつけて「メタ認知」という概念を設け、それについて研究することが必要なのかを述べる中で、「(認知という言葉に)メタを加えることが実質的な強調点の変化を反映している場合には一私はそう信じている—そうした付加は認められるべきである。メタ認知的と称される過程は知識の重要な側面であり、主要な関心事は認知それ自体よりも自分自身の認知についての知識にある」(p.5)と述べている。この指摘はメタ言語研究についてもあてはまると本研究では考える。先に述べたように、メタ言語を研究するということは、言語を言及するものと言及されるものに分けて、言語現象について考えるということである。この観点に立つことは、言語現象の分析における「実質的な強調点の変化を反映」していなければならない。そうでなければ、メタという

観点に立つ必然性がないからである。それでは、談話の問題を考える際に、メタ言語という観点に立つことによってもたらされる実質的な強調点の変更は何だろうか。本研究では、それは、談話展開を談話それ自体として分析するという観点から、談話を話者自身の談話についての意識とともに分析するという観点への変更であると考え。話者はメタ言語を使って、談話の中で何をしているかという観点で談話を分析することによって、言及した部分に現われた話者の意識とその結果としての談話展開を分析することができる。そしてこの分析は、談話の中のメタ言語の機能を論じることによって可能になると本研究では考える。ゆえに、メタ言語は談話から切り離さずに、話者の意識のあらわれとしてのメタ言語を含む談話全体の構成の中で機能を論じなければならない。また、「機能」について論じるには、その機能の実効性という側面、つまり、聞き手にとってメタ言語は談話理解に役立つのか、話し手の談話展開のどのような面にメタ言語は役立つのかという有用性の分析が不可欠である。

これらのことから、本研究では、談話分析においてメタ言語という観点にたち、次のような研究目的を設定した。

1—4 本研究の目的

本研究では、談話におけるメタ言語の役割を解明することを目的とする。メタ言語を談話から切り離して分析するのではなく、談話の中において、談話の展開と談話の理解に有用であるのかを検証する。さらに、もし有用であるならば、それはなぜなのか、また、メタ言語使用を談話の展開と理解における問題を解決するための方略として使うことはできるのかの点についても検証する。

1—5 談話におけるメタ言語の役割についての仮定

これまで述べてきたメタ言語についての知見から、談話におけるメタ言語

の役割について以下の仮定をすることができる。

第1に、話者はメタ言語を使って、①言及した内容、②語っている間に考えた内容、③自分が置かれた状況、④聞き手の理解についての意識をそれぞれに対する解釈という形で表すことができ、その結果、メタ言語は個々の談話中で Stubbs (1983) の言う調整的な機能を果たすと考えられる。メタ言語が、言及した部分や状況に対する話者の意識をあらわすという点については、杉戸 (1983) にも共通した認識が見られる。しかし、杉戸 (1983) は、メタ言語を文脈から切り離して分析した研究であり、メタ言語の談話における機能を論じた研究ではない。従って、メタ言語の談話全体に対する機能という点はまだ解明されていない。

第2に、メタ言語は、上に挙げたような点についての解釈を示すことによって、談話全体を結束性あるものにし、談話に構造をもたらすと考えられる。これは Schifffrin (1980) を踏まえている。しかし、Schifffrin (1980) の談話例は断片的で、談話の構造を考えるのにふさわしい例ではなかった。従って、この点も十分に解明されているとは言えない。

第3に、メタ言語がこのような機能を談話中で果たすことによって、聞き手の談話理解は促進されるであろうと考えられる。第4に、もし、談話理解にメタ言語が役立つならば、メタ言語を談話理解の問題を解決する方略として使うことができるであろう。第5にもし方略として、メタ言語を使うことができるならば、他者の談話を受容して、自分の談話を発展的に展開させる際にも有用であろうと考えられる。以上のように、談話におけるメタ言語の役割を仮定したことによって、解かれるべき問題として、以下の3つの問題を指摘することができる。

1-6 談話におけるメタ言語の役割について解かれるべき 3つの問題

第1の問題は、メタ言語は実際の談話の中でどのように使われているのか

という問題である。話者は談話の中でメタ言語をどのように使い、何をするのか。そして聞き手は話し手の談話の何を聞き、その結果、談話の場はどうなってゆくのかを明らかにする。

メタ言語には話者の意識が表されていると仮定すると、メタ言語の機能分類をして、その機能をそれぞれの談話について論じることで、話者がどういうつもりでメタ言語を使い、その結果、談話はどうなったかを明らかにすることができると考えられる。さらに、話し手と聞き手の相互作用のある場での分析を行えば、メタ言語を使った談話が聞き手によって、どのように受容されたか、また、その聞き手の受容によって、談話の場における話題がどうなったかを分析することができる。この問題は第2章で、明示的に発話について言及することが可能である討論場面を取り上げて扱う。ディベート・シンポジウム・テレビ討論場面でのメタ言語使用の実態を調査し、談話資料を収集して分析をする。[研究1]として各討論場面におけるメタ言語使用の量的分析を行い、[研究2]として、メタ言語が使われている個々の談話についての質的分析を行う。

第2の問題は、メタ言語は談話の展開と理解に役立つのか、そして役立つとすればそれはなぜなのかという問題である。メタ言語に先に仮定として述べた談話に構造をもたらし機能があるならば、メタ言語を含んだ談話は聞き手に理解されやすいはずである。この仮定を検証するために、第3章において、談話理解についての条件を統制した実験を行う。メタ言語が談話理解に役立つかどうかの検証であるので、日本語母語話者（以下、母語話者）のみならず、母語話者よりも日本語運用能力が低い日本語学習者⁽³⁾（以下、学習者）にとっても談話理解にメタ言語が役立つかという点は重要である。従って、[研究3]として、母語話者を被験者として聴覚情報の理解（以下、聴解）についての実験を行い、[研究4]として、学習者を被験者とした実験を行

(3) シンガポール人学習者。詳細についてはそれぞれの章で述べる。

う。なぜ、メタ言語が聴解に役立つかという問題は[研究3]、[研究4]の実験結果についての考察として述べる。

また、談話の理解に役立つかという問題を発展させて、談話理解が問題となる場面において、メタ言語は問題解決方略として有効かという問題も検討する。この問題は第4章で扱う。[研究5]として、母語話者と学習者とのインタビュー場面を設定し、そこで学習者が談話理解の問題に直面した時、どのような方略を用いているか、その方略の母語話者による受容はどうかについての調査を行う。

第3の問題は、メタ言語の使い方は教える事ができるのかという問題である。この点については、[研究6]として、訓練をすれば学習者は談話理解の問題に対する問題解決方略としてメタ言語を使えるようになるのかについての教授実験を行う。

本研究では、談話展開にメタ言語が役立つかという問題も扱うが、この問題を扱うためには、談話展開に関する、以下の3つ側面を考察する必要がある。すなわち、①談話を展開することそのものに役立つかという問題、②理解しやすい談話展開に役立つかという問題、③談話を発展的に展開するのに役立つかという問題である。①については、第4章の[研究6]において考察する。②については、第3章において考察する。③については、発展的に談話を展開することを義務付ける課題として、作文推敲課題を取り上げ、学習者の作文推敲過程を検討することによって考察する。この問題は第5章で[研究7]として扱う。

1-7 本研究で用いる研究方略

以上の問題に答えるためには、①メタ言語使用の実態を明らかにするための実際の談話の収集とメタ言語についての機能分類分析、②メタ言語の有効性を実証するための実験、③場面や課題を設定してのメタ言語による問題解決過程の観察が必要である。これは、実験的手法と観察・記述的方法を併せ